

図書館情報学科への期待

本学の図書館情報学科は、昭和六十三年度はじめて卒業生を世に送り出した。社会に有用な人材を供給することは、大学にとって最も重要な役割であり、世間の高い評価を受けることができたのは幸いであつた。学内においても、施設設備の近代化に大きな指導性を発揮され、図書館は面目を一新している。国文科との関わりからみると、国文学研究資料館のデータベースとの接続、名古屋大学を通じての国立大学間のコンピュータネットワークとの接続がそれぞれ可能となつた。感謝にたえないところである。現状は国文関係のデータベースそのものが弱体であるようだが、その将来性を考慮すると、現段階で手がうてたことは時宜になつてゐる。次世代の国文学研究者には、我々とは異なり、機械を使いこなせる人材が輩出していることであろう。図書館情報学科におかれても、ワープロ、パソコン等の手ほどきを惜しまれず、ただただ我々が機械に弱いことに恥じ入るのみである。また四年生のうち、卒業論文で我々国文科教員を調査研究の対象とした

学生もあり、科としても国文科に対し関心を持たれているように感じられるのは心強く思われる。

けれども現代のように学問のそれぞれの分野がきわめて細分化されているような時代には、隣りの学科が何をやっているかがまずわからない。おたがいに共通の興味があるのか、相手を説得する論理性を構築し得ているのか、多々問題点を指摘できるように思われる。調査に來た学生と、あるいは個人的な場においての教員同士で、会話や討議をしてみると、時には激論を闘わせるような様相を呈するに至つても、どうやら話を通じていないといふもどかしさ、言つてよければいらだちを感じるのである。

例えば私のところに調査に來た学生の持参したアンケート項目である。正確に記憶していないのだが次のような項目があつた。これらはいずれも我々国文科の人間から見ると答えようもなく、また無意味にも思われる。「あなたの蔵書は何冊ぐらいか。」という質問がある。国

岩 下 紀 之

文の研究者ならば、大抵の人は、自分が何冊の本を持っているか数えたこともなく、数えようと考えたこともないのでなかるうか。狭い家があります狭くなる、引越しがますます大変になるというようなことは実感している。計画的、組織的に本は買っているが、目録を作る必要はあるとは限らない。文庫本、新書などを含めると、我々は数千冊から一万冊位所蔵しているのではないだろうか。この程度ならば該当する本を持っているかどうかはすぐわかるのであり、同じ本を二度買うようになると、根本的な整理が必須になってくる。そこまでいかないうちは、全部で何冊かなど知る必要もない。第一数千などという数は、ただ一秒に一と数えるだけでも百分もかかってしまう。そんな空しい作業をして何になろうか。「研究時間はどのくらいか。」といわれても、誇張していえば、夢の中で何かひらめかないか、わらをもつかむ気持で眠りにつくくらいなのが研究者というものである。「どの図書館を何度使ったか。」という質問もこまったものである。三箇月間何かの文献にとりくんだとする。古写本を所蔵する図書館に一度行き、参考資料を見るために十回大学図書館に行ったとする。最も基本的な書物は書齋に備えつけてあるので、連日籠って百回研究したとする。図書の質が問題なのであって、この数字を加えて百十一回という答えを出しても全く意味がないのである。一般の図書館の利用者についてはこのようなアンケートも意味があるかもしれないが、専門の研究者にとって、これらの質問は意味をなさず、したがって集計したところで有意の結果が見出されるとは信じがたい。

このように見るだけでも二つの学科では何かすれ違いが生じており、溝があるようだ。これを乗り越えるためには、我々のほうでも図書館情報学について調査研究の必要があろう。以下率直に意見を述べてみるので、忌憚ない御教示を賜わることができればと熱望する次第である。

—

情報化社会という言葉が流行語になっている現在ではあるが、しかし情報学とはどんな学問であるのかは、我々部外者にはなかなかとらえどころがない。また国文学は現代の日本の大学において外国語の能力を求められない唯一の学科に事実上なっている。我々にとって外国語の文献は存在しないのと同じことであり、視野の狭さを自認せざるを得ないのであるが、幸にも本学の同僚である岡澤和世氏の著書『情報学講義ノート(1)』、津田良成氏の論文「図書館情報学の動向」(『愛知淑徳大学論集』13号)に接することができた。いずれも論旨明確な行文で、これらを通して情報学の実態をうかがってみたい。

岡澤氏の著書は、「情報の伝達と利用」研究活動に占めるインフォーマル・コミュニケーションの位置とその研究動向」「見えざる大学…日本の政治学者の情報伝播」「わが国の知覚心理学研究者間のコミュニケーション・ネットワーク」の四章からなるが、それぞれが独立した研究論文となっており、私などにもいろいろな意味で興味深く思わ

れるものである。はじめの二論文と三番目の論文の前半部分は情報学の理論をとりあつかい、それ以後の部分は実地の調査とその結果、並びに批評からなっている。津田氏の論文は情報学の動向という題名通り、現在の米英の図書館学を紹介されたおもむきで、これまた有益な示唆を多く含み参考になった。本稿では主に岡澤氏の著書をとって感想を述べてみたいと思う。

「情報の伝達と利用」の章は、1、情報の定義、2、科学のコミュニケーション、3、インフォーマル・コミュニケーション、の三部分から構成されている。まず情報の定義としてはブルックス、マクダフ、ベルキン等、諸学者の情報の定義が紹介され、論じられ、「インフォーマルな情報には、意見、判断、予感、直感、うわさ、個人的経験、虚報、ゴシップなどが含まれる。」また「フォーマルな情報には資料の他にさまざまな請求書、計画案、法律規定、判例、計算書、予算、業務要求、コミュニケーション要求、問題解決プロセス等、多くのものが含まれる。」と結論づけられている。情報学がきわめて広い範囲を視野におさめた野心的な学問であることがよくわかる。2、科学のコミュニケーションの部分では、科学者の情報入手方法が論じられ、オー、ハーバート、アコフ等の研究が紹介されている。科学者の利用する情報は基本的には論文であると見、それについてさまざまなことが論じられている。いずれも興味深く読まれるが、例えば、「平均的科学者は年間どの位雑誌論文に目を通すかという質問に対して年間約30、000編位という数字が提起されている。これはざっと目を通

す程度のこととて、そのうちの10%がいわゆる精読されるという。」などという文章には一驚した。一年三六五日とすると、毎日八十編強の論文に目を通すことになる。そのうち精読されるものは10%としても、一日八編強の論文を読みつづけることになる。我々国文学の研究者にはとうてい信じがたいことである。最も義務的な卒業論文の審査の時期とて、このような数を読みこなすのは不可能ではないか。我々と科学者とは、同じ論文という単語に対して異った概念を持っているように思われる。3、インフォーマル・コミュニケーションの部分は、雑誌等のフォーマルなコミュニケーションに対し、「インフォーマルなチャンネルを通して伝達される情報」が存在することを指摘し、論じられているが、これについては次の第二論文でよりくわしい記載がある。

すなわち次の「研究活動に占めるインフォーマル・コミュニケーションの位置とその研究動向」の章は1、研究活動に占めるインフォーマル・コミュニケーションの位置、2、インフォーマル・コミュニケーションの意義、3、インフォーマル・コミュニケーションのフォーマル化、の三部分にわけて意を尽している。最後に、「おわりに」として総括の部分があり「インフォーマルなコミュニケーションによって結びついたネットワーク、つまり見えざる大学」が持つ重要性を再度指摘している。この「見えざる大学」は何やら大変な発見であるように意識されているようだが、普通研究者は、何らかの私的研究会に所属し、同じ専攻の研究者と抜き刷りのやりとりなどしているもの

である。そういった関係に名称をつけただけのようにも思われる。

この「見えざる大学」について次章「見えざる大学…日本の政治学者の情報伝播」でさらに論じられる。1、見えざる大学とは何かの部分で、その特徴、機能と構造等が論じられる。2、社会科学者の研究情報利用活動の項では、紹介されているイギリスの政治学者の動向が興味深かった。すなわち彼等の使える語学は平均すると、一・六ヶ国語にすぎない。回答者のうち18%は英語しか使わない。定期的に外国の文献を走査しているのは回答者のたった1/2であった。回答者の62%が外国の文献は自分の研究に影響を及ぼさないと答えている等々、これではまるで国文学の研究者のようではないか。西洋人はみな語学の達人であるような先入観は、どうやら神話にすぎなかったようである。英語ができれば外の言語は知らなくてもよいらしい。

以上を概観すると、情報学はあらゆる情報を視界におさめつつも、現状では自然科学者の論文利用の実態について興味を中心をおき、これをモデルとしてさまざまな考察が進められているようである。きわめて現代的な、しかも実務に役立ち、それぞれの分野の研究者に有益であろうとしているような印象を受ける。それでは、日本の政治学者についての実地調査とその結論はどれほどの効果をおさめているか見てみよう。

二

日本の政治学研究者の動向をどうとらえるか、先に見た情報学がどれほど役立ち得るか、情報学自体を我々の目でとらえかえてみよう。岡澤氏の著書、第一論文に付載された参考文献のリストに二十五種のハーバート、アコフのもので、一九五八年の日付がある。第二論文の参考文献では一九六四年、第三論文では一九六一年のものがそれぞれ最も古い。こうしてみると情報学はきわめて新しい、現在のな学問と言えるが、逆に見ると、今現在の瞬間的な分析には力を發揮するかもしれないが、歴史的なものの方、つまり時間軸に沿って上下して行く見方について弱点がないかどうか心配される。同じように、これから参考文献のほとんどが英語によるものである。第一論文の参考文献すべてが英文で、そのうち二種に日本語訳があるにすぎない。第二論文についてもただ一種が日本語によるものである。第三論文ではやや日本語によるものが多いが、それでものべ五十三種引かれるうち五種あるにすぎない。すなわち情報学は英米において形成され、とりあつかわれる題材は英語による自然科学系の論文の処理となりそうである。

また、情報学がとりあつかう研究者の専門分野そのものについて岡澤氏は一切関心をもたない。53ページを見れば、酸化有機化合物、科学技術、小集団研究、国際関係論、教育学、分子生物学のバクテリア

ファージ領域、高エネルギー物理学、睡眠と夢の研究、心理学、物理学、農村社会学、数学、医学医療、子宮頸部異型上皮、マンガンの人体影響、睡眠の心理学的研究、畜産学と獣医学、政治学、知覚心理学、それぞれの研究者の、インフォーマル・コミュニケーション調査例の一覧表がある。これら諸学がいかなる学問であるのか、またどういう内的論理によってある情報、ある論文を必要とするのか、こうした一切合財が岡澤氏の目には存在しないのである。

1、歴史的なものの見方、2、英語によって組み立てられた学であること、3、とりあげる研究者の専門分野についての無関心、以上の三点を、情報学を外部から見つめるもの目からは危惧するのである。自然科学の分野では真理は何語によっても言いあらわすことができる。ピタゴラスの定理を中国語であれ、日本語であれ証明することができる。けれども人文系の学問においては必ずしもそうは言えない。言語はある民族、ある社会と切りはなし得ないのである。「犬」を意味する単語はどの言語にも存在しうる。しかし、共通するのは四つ足の尾を振る動物と言う位のことであり、そこから切りはなし得ない連想、つまり、ある言葉を使う社会では愛玩動物、別の社会ではいやしむべき下等な生物、ある社会では美味な食料というような情報は、どうにも他言語、他の社会に伝えきれないのである。まして体系的な思想、宗教についてはなおさらである。アリストテレスが「形而上学」において、*το τι εστι* という時、このような冠詞あるいは冠詞の用法を持たない別の言語には翻訳不可能なのである。

しかしながら世界的な大宗教にあっては、他言語への翻訳について冷淡ではられない。しかしインドの仏教と中国の仏教、ユダヤ教とキリスト教は、ある程度まで聖典を共有するにもかかわらず、互いに何と異なっていることだろう。インドの言語を中国語に翻訳する時、どれほど多くのニュアンスの相違が生み出されることだろう。翻訳者の誠意はこういう場合充分に信頼できるはずで、彼等は生命の危険を犯してまで旅行をし、国王とも対決を辞さない人々なのである。しかし「中国文学とインド文学とはどちらも古い歴史を持ち、独自の発達を遂げていたのであるから、インドの原典を中国語に翻訳するときに、必ずしも原文に忠実であったのではない。」⁽¹⁾

ユダヤの聖書をギリシャ語に翻訳した七十人訳について Koehler はこう言う。

The diversity in the tradition may have influenced them from the beginning, and there arose in consequence misunderstandings of the Hebrew text, as is revealed especially by the Septuagint.⁽²⁾

初代のキリスト教徒が『イザヤ書』七・一四の *παρθενον* をどう解釈するか、『創世記』一一・一八に言う *orepua* をパウロが『ガラテア書』三・一六でどう解釈したか。このような場合、彼等は『七十人訳聖書』によってギリシャ語の語感において考えているのであり、ヘブライ語の原典とは多少の教理的なかたよりがあらわれ得るのである。⁽³⁾

このような、言語による、さらに言えばその社会の独特の個性の違

いによる変質は現代社会にも見ることができ。中国共産党もまたマルクス主義の政党といわざるを得ない。指導者毛沢東は一九五九年廬山会議において、彭徳懐から公然たる路線闘争をいどまれ、席上に十分にわたる演説を行なった。理論的というよりは雄弁なアジテーションというべきもので、テキストは『毛沢東思想万歳』⁴ 丁本におさめられている。末尾はこうである。「同志諸君、自分の責任を分析してみなければならぬ。クンは引っぱり出し、尻はひることだ。そうすれば腹の中はすっきりする。」ヨーロッパの社会主義者が、このような口調で、権力闘争の現場で語るとはとうてい想像できない。ロシア革命の最中であっても、一寸考えられないことであろう。このテキストは文化大革命のさなか、個人崇拜の雰囲気の中で出版された資料で、毛沢東をおとしめる意図は、一切ない。とすると、中国語の文脈では、「有屎拉出来、有屁放出来、肚子就舒服了。」⁵ という言いまわしは、必しも異常でないであろう。また彭徳懐の行動も、我々には韓愈の『仏骨を論ずる表』を思わせるものであって、現に文革は彭徳懐を明代の硬骨漢、海瑞に言よせた論争から開始されたのであった。以上述べたのは、宗教、思想等、最も翻訳に力を込めるはずの分野でさえ、異った社会に移植されたそれは、もとの社会のそれとは相違して来ざるを得ないことを見たのである。

また現代の社会では、あたかも英語が共通語のように見える。しかし世界史を振り返れば、民族を越え、国境を越えて通用した言語をいくつも数えることができる。シユメール語、アッカド語、アラム語、

ギリシャ語、ラテン語、フランス語、いずれも共通語として通用し、やがてその力を失っている。東洋にも同じように、漢語、サンスクリットがある。ある言語は、それを生み出した民族、国家の弱体化により、またある言語はその言語そのものの発達により方言を分化させ解消してしまう。またある言語は特定の一時期的状態を固定化して生きのびたのである。ギリシャ語は口語として通用していたヘレニズム期のコイナーをさしおいて、前五世紀のアッティカ方言を規範としてうけ入れ、ビザンティン帝国とともに生きのびている。強力な古典語は多少ともこれと類似した径路をとり、口頭では通じなくとも、書面上は直ちに意志の疎通をはかることができる。中国各地の方言は耳では理解されなくとも、文字にすれば理解される。それは国境をも越えて、日中の知識人同士も筆談によって会話していたのである。たぶんラテン語もそうであったので、イギリス読みのそれと、フランス読みのそれとが、即座に通じたとは考えにくい。⁶

英語もこうした道のどれかをたどるに違いない。アメリカの国力のいつの日かの没落、あるいは、英語圏諸国の方言分化による共通性の喪失、あるいは口語と共に変化することを断念し、現状を固定して文語として生きること。そのような場合、後世は標準語としてヴィクトリア朝の言語、またはアン女王の英語を採用するかもしれない。すなわち英語もまた歴史的な存在であり、やがては何らかの形で変質を上げるのは自明である。その時、情報学は生きのびることができるであろうか。

前項でとりあげた虞れ、すなわち、情報学の歴史的なものの見方の弱さ、もっぱら英語によっていとなまれてきている自然科学にモデルを求めめる限界、対象とする学問そのものの内的論理についての無関心といった要素は、第三論文後半の政治学者に対する調査分析に累をおよぼしていないかどうか。私の危惧は残念ながら杞憂には終らなかつたようである。

政治学者の実態調査はどのように行なわれるか。97ページによると、観察法、面接法、質問紙法等によって行なわれるのである。面接なり質問なりによって調査するためには、前もって政治学それ自体がどんな学問なのか知っておくべきであろう。けれどもそのような関心は全くうかがえない。単に政治学者の行動を外側から見分るにすぎないように見える。観察法とやらに至っては何と言ったらよいだろう。あたかもフーブル先生との言わぬ虫けらの図式を思い起こさせるではないか。政治学とはどのような学問で、研究にはどういう方法があるか、またそのためにはどんな書物を読むか、というように質問してみたらどうであろう。その時暇であつたら政治学者も初心者むけに答えてくれたであろうに。131ページにおさめられた質問票は、やはり「貴方の研究活動に重要な影響を与えたとお考えの研究者名をお書き下さい。」以下、外面的なことばかりである。この程度のアンケートによって得られる結果は、およそ予想がつく。115ページには政治学者

の「こんな結果ははじめからわかつていた」という発言が引用されている。岡澤氏はその時の彼らの口もとに浮んでいたはずの失笑、苦笑のごときものに気付くべきであつた。

103ページ以下の「資料による探索結果」について、いくつか論じてみよう。まず政治学者の年齢分布について岡澤氏は言う。

40歳～50歳が最も多く全体の37%を占めている。40代、50代で全体の57%となり高齢化社会であることを示している。80歳以上が10人もいることもその原因である。40歳以上の研究者で全体の74%を占めている。

文脈から見ても、「高齢化社会」を否定的にとらえていることは明らかである。しかし、このような年齢分布をもつて高齢化社会であると論断することには全く意味がない。何故なら政治学者としての適齢期などというものがあろうだろうか。何に比較して高齢と言うのであるうか。例えばある種の運動選手は十代の人間が最もすぐれるということとは言えよう。しかし落語の名人などを考えれば、これは六十代、七十代の人々となるであろう。落語のように、多くの経験を必要とし、膨大な知識を不可欠とする、高度に知的な分野にあつては、能力を最も高度に發揮できる年齢が高齢であるのは当然である。政治学者が後者に近いであろうことも明らかである。ゲーテのこんな言葉を味わってみるのもよいことである。

「おもしろいことは、すべての才能のうちで、音楽の才能が最も早くあらわれることです。ですから、モーツァルトは五歳で、ベ-

トーヴェンは八歳で、そしてフンメルは九歳です。既に、演奏や作曲によって周囲の人たちを驚かせています。「音楽の才能が」とゲーテは言った、「たぶん最も早くあらわれるのは、音楽はまったく生れつきの、内的なものであり、外部からの大きな養分も人々から得た経験も必要でないからだろう。しかし、モーツァルトのような出現は、つねに解きたい奇蹟であるにちがいない。」

「外部からの大きな養分」「人生から得た経験」等が政治学者にどれくらい必要なことであろうか。

また岡澤氏は言う「政治学界で圧倒的な力を持っているのは東大出身者である。東大出身者は全体の32%を占めている。」「東大の同系繁殖率は100%であった。京都大学、九州大学についても同じような検討が行われた。京都大学の自給率は98%、九州大学では75%で、残った席は東大で占められていた。私立大学で最も政治学者を多く生み出しているのは早稲田大学(60人)と慶応義塾大学(39人)であった。」

そもそも研究論文は未知なるものを既知なるものに変えるところに存在意義がある。日本の学問の世界で東大が最大の学閥であることを知らないものがあるか。全国の高校三年生のうちにこのことを知らないものがあるか。このようなことが情報学においては未知に属するものであろうか。とすると情報学とは一体何なのか。京大、九大、早大、慶大についても同じことである。これらの大学の出身者が研究者としての能力に乏しいならばこれは許しがたいことである。またこれらの大学が、特定の階級にのみ門戸を開いているとしたら、それも許しが

たいことである。しかし、そのような事実が証明できるだろうか。もしこのような統計資料を有意義なものたらしめるとするならば、歴史的な調査を試みたらいかかなものであるか。明治時代、全国に大学が東大一校しか存在しなかった時代、学閥とはどのように機能していたか。やがて大学が増加していった時、どのように変化していったか。あるいは、ナポレオン以後のフランス、辛亥革命以後の中国というように、英語圏以外の国々と比較されたらどうであろう。

岡澤氏はさらに言う「第七表は使用文献の情報源の利用順位である。驚くべきことに1位と2位で書齋の利用は95%に達している。いかに情報を得るために書齋が使われているかが一目瞭然である。」「質問9からのデータ分析結果は期待した程書齋指向の弊害を語ってくれなかった。」質問9というのは、政治学者に質問したアンケートで、「使用文献の情報源として主にどこを利用なさいますか。」というものである。これらはまことに驚くべき文章である。一般に研究者が書齋で研究するほどあたりまえなことではない。この誰でも知っている事実が調べなければわからず、しかもこの結果を「驚くべきこと」と感ずるというところに我々は驚く。岡澤氏は書齋におさまっている蔵書が、どのような径路でそこにあるようになったかを知らないのである。この蔵書は、研究者が自らの見識によって選書し、若いころから身銭を切つて揃えていった書物の集合体なのであり、自らの研究史に沿って発展してきたものである。自らの研究にもっともふさわしい体系的な蔵書ではあるものの、この蔵書の限界を所蔵者以上に承知しているものは

ありえず、それを越えた範囲の書物を見るために、研究者はさまざまの図書館を利用し、使いこなしているのである。だいたい研究者個人により、どの時間に能率があがるかは全く違っている。午前2時に執筆するという人に対応できる公共図書館を要求するのが合理的と言えようか。どんなサービスのない図書館でも、書齋の本棚から目ざす本をとりだすのと同じ速さで資料を提供できるわけがない。万難を排して書齋を充実させる理由は明らかではないか。岡澤氏の頭には、アメリカの自然科学者の行動様式があるのみなのである。人文系の研究者の蔵書がどのような書物から成立しているのか。どのような書物を私有しどのような書物を図書館で見ると、それをまず尋ねるべきなのである。これがすなわちそれぞれの学問の内的論理性というものである。

以上について総括して、岡澤氏は箇条書にして次のように言う。

研究者が自分の手元に現物を置いておきたいという気持は日本の研究者に限った性向とも思われない。にもかかわらず特に強いということはどうしてであろうか。一つには情報量の増加は仮想であつて実際は手元の本だけで十分だという考え方、今一つは情報入手の物理的困難さが自己負担金内で現物入手を可能にしている、第3には個人の書齋の方が充実している、第4には大学などの所属機関が研究費を与えすぎている、第5には全く個人的気質の結果、第6には本が安いことなどが考えられる。

ここで言わんとするところは明確に言いつくされているが、その誤り

図書館情報学科への期待（岩下紀之）

の程度によって印象的である。私はこれを深刻な誤りと考える。図書館という教学の中枢において情報学と人文系諸学が出会わざるを得ないからである。

政治学的内的論理について、我々は代わつて説明の任に当ることはできない。しかしながら岡澤氏の使用された程度の質問票がもし国文学者に対して宛られたとするならば、ここで論ぜられたような結果になつたことは全く疑う余地がない。国文学研究者も書齋で研究し、「高齢化社会」であろうし、いくつかの大学による学問もあることだろう。こんなことは調査するまでもなく、わかりきっている。むしろ国文学という学問分野がどのような内的論理、言いかえれば、方法論によつて動いているのか、御紹介申し上げたい。そうすれば観察法とやらをどこされる無意味な時間も必要がなくなるといふものだ。何しろ被調査者はその行動について説明できるとは想定されていないようなのである。しかしバラムのロバ、アキレウスの馬のように、口をきかないと思われていた動物でも、時には話しかけることがあるのである。

四

「情報学とは何かということになるとその定義は百人百様で、従つてその学問対象範囲についても定説は存在していない」と津田氏は言われる。国文学についても同じことで、定義をするとすれば、各人異なつた考えを持つことであろう。しかし、研究対象は現に目の前にそ

びえており、学問としての定義などするまでもない、とも言えるのである。

国文学がとりあつかう時代は、大きくわけて江戸末までの文学、明治以降の文学に二分できよう。このわけかたそのものにも、いくらでも別の見解は成立しうるが、本稿では、この前提で論じてみよう。私自身中世の研究者であるので、それを足場として論を進めることにする。各研究者によって、さまざまな考え方があがるが、以下の二点を特に論じてみたい。すなわち、国文学とは古典学であるということ。次に研究する本文が写本として伝えられているということである。

さまざまな民族が過去の時代を特別な時期として意識する。日本においては例えば延喜天曆時代ということになる。『古今集』『伊勢物語』の成立した頃である。それ以後の教養人は、このような書物を丸ごと暗記している必要があつたのである。けれどもそれは受験勉強のように機械的に覚えこんだことを意味しない。当時無数に存在した和歌、和歌集、物語のうち最も秀れた作品であり、愛読された書物であつたからこそ、自ずから諳んじられ引用され、ひいては現代にまで伝えられてきたのである。こういう人々の社会は、江戸時代の終りまで存在しつづけていたのであることを、まず銘記すべきである。また、これら選ばれた書物が古典であり、それらの書物は、またさらに生産的であると言える。『古今集』『伊勢物語』を諳んじている人によって『源氏物語』が作られ、それらを諳んじている人々によって『新古今集』が成立するというように、古典的な作品、規範的な作品は再生産

されて行くのである。やがては、それら古典は、後世の人々に対し權威となり、重圧ともなつて行く。日本の古典はたかだか千年程度の年月に耐えたに過ぎず、中国、インド、ギリシャ・ローマといった文明には、時間的には及ばない。けれども、前述したような享受のありかたは、これを古典と言ひ、これについて研究する学を古典学と称するのを許容すると考えられる。

その享受の具体的あらわれは例えばこのようである。清原元輔が「末の松山波越さじとは」と詠み、紫式部が『源氏物語』桐壺の巻で、「くれ惑ふ心のやみも、たへがたき片はしをだに、晴るくばかりに、聞えまほしう侍るを」と、桐壺更衣の母君に語らせる時、彼等は別に謎々遊びをしているのではない。しかし、『古今集』の、「君をおきてあだし心を我持たば末の松山波も越えなむ」を記憶していない人には、元輔の歌を恋の歌と理解することができない。『後撰集』の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」を知らない人には、「心のやみ」が親子の情と関係する語とはわからない。平安朝の読者が、説明の必要もなく即座に理解できたのはもちろんのことである。

こういう事例は中国にも西洋にもある。『子不語』という小説の題を見ただけで、内容について予想のつくのが知識人なのである。現代の日本人にはこれは単なる漢字三字にすぎないであろう。この三字が意味を持ちうるのは「論語」の「子不語怪力乱神」という一節を思い出すことのできる人にとつてのみである。明治の日本人にまでは、この感覚はなお伝わっていたのであり、明治維新といい、鹿鳴館といい、

その命名に込められた意味は彼らには明かであった。何故なら、『詩経』に「文王在上 於昭于天 周雖旧邦 其命維新」⁸とあり、また「呦呦鹿鳴 食野之苹」⁹とあり、政治体制の一新、賓客をもてなす建物にそれぞれふさわしい命名だからである。

西洋においても同じことが言えるのであって、最も見やすい例としては引照付の『聖書』がよろしかろう。新約の部にどれ位旧約の引用があるか、一瞥にして認識できる。古典的な詩文というのはこのようにして作られるのであり、日本の文学もそのように作られてきたので、その研究を古典学と呼ぶのである。

言語はたえず変化して行き、「東路のなほおくつかた」¹⁰に成長した少女が一気に読破できるような平易な言葉で書かれたはずの『源氏物語』も、時代とともに難解な作品になって行く。古典と享受者との時間的な距離が延びるに従って、各時代にその注釈書が著作される。歴史の撰択はそれにも働き、現代まで伝わっているような注釈そのものも、研究の対象になってくる。このように、古典学のとりあつかう書物は年々堆積してくるものなのである。

それではこれらの作品はどのように伝わってきたのか。言うまでもなく各時代の愛読者、崇拜者が手写した写本によるのである。日本は全般的に平和な国であったので、古写本の伝来するものはきわめて多い。『万葉集』や『古今集』は平安時代の写本があり、『伊勢物語』『源氏物語』でも鎌倉時代のものがある。仏教の經典などでは奈良時代のものも珍らしくないほどである。中国では宋代にすでに印刷術の

時代となり、校訂には、宋本をもととして、校勘資料には敦煌本や、日本伝来の古写本をもつてするようである。勿論あれほど古い文化を持つ国であるから、『老子』の漢代写本が発掘されるなどの発見が今後も期待される。さてこの宋代というのが日本でいえば平安鎌倉時代に対応するのである。

西洋においては、さすがに『聖書』の写本はずっと古いようである。ヴァティカン写本、シナイ写本、アレクサンドリア写本等のギリシャ語聖書の写本は、四、五世紀にさかのぼるといふ¹¹。エジプトで発掘されるパピルス断片は、さらに古いものがあるそうである。それに対し、ヘブライ語の聖書は、もつと降って、九世紀末のレニングラード写本が完本として最古のものといふ¹²。零本断片ということになると、有名な死海写本をはじめ、紀元前のものもかなりあるようである。しかし、世俗的な文学作品ということになると、ホメロスが十三世紀、悲劇が十世紀というように、日本や中国の文献とあまり差がないようである。日本で印刷業が本格化したのは江戸時代に入ってからである。芭蕉も西鶴も版本によって同時代人に愛読されている。しかし、『古今集』『源氏物語』等は盛んに出版されるが、よい本文とは言い難かった。良い本は公家の家に蔵せられ、出版業者の見られるものではなかったのである。国家的な出版だった宋本のような権威は、日本には存在しない。西欧ではルネサンス期の人文主義者によって、すでに近代的な校訂本が大量に出版されている。日本ではそのようなものは、明治以後、というより、戦後になってからでなければ、一般化しなかった。

ただ、古写本の質量は『国書総目録』全八巻によってうかがうことができる。そのような写本群をもととして展開されるのが国文学の研究なのである。

五

国文学の研究者という立場から岡澤氏の引く、イギリスの社会学者の調査には、驚嘆させられる。十冊以下37%、十一冊～二十五冊32%、百冊以上8%という数字は、現在の研究に関係のある蔵書数という限定のもとでも我々とはあまりに異なった数である。国文の立場からすると、『日本古典文学大系』『日本国語大辞典』『大漢和辞典』というように最も基本的な書物だけで百一、三十冊になってしまう。日本の心理学者の蔵書数として、二百冊以下から千冊以上の割合を示す数値が144ページにあげられているが、国文の研究者の蔵書数は、その約十倍になると考えられる。

それでは、それらの書物は具体的にはどういうものなのか。まず第一に当然さまざまな作品の本文である。第二には、その注釈書、研究書である。第三に、それらの背景をなす歴史書、史料、漢籍、仏典といった一群である。その他に辞書、事典類が当然含まれる。別に楽しむのための小説類等もあり、以上が蔵書の内容というわけである。一体天文を愛好する中学生がいるとして、その使用している望遠鏡から大規模な天文台の設備を想像するのは大変なことである。国文学者は

一冊の本、一人の作家、一つの時代、というように極めて限定された分野を一生読み続けるのを仕事にしている。しかし、文庫本の『徒然草』一冊で用が足りるというわけにはまいらぬのである。

私自身のことについて述べさせていざと、専ら室町時代の連歌を準備範囲として、とほとほと研究を続けているものである。研究者が自分の専攻として選んだ分野は、自由意志で選んだ一生の愛読書、いわば生涯の伴侶である。日ごろたえず読みかえし、反芻をくりかえしているものを、どうして借り物ですますことができようか。また連歌作品は古写本の活字化が遅れているので、本文を見るためにはいろいろな所蔵者のもとに出向き、手ずからノートに書き写したり、カメラと三脚を持参して写真に撮影したり等、さまざまな形を通して研究をすすめるを得ない。こうしたものは蔵書の冊数に数えようもなく、ここでの議論にはあまりなじまないとと思われる。また率直に言って、国文学の研究の立ち遅れと評すべきかもしれない。けれども、写本の時代が最近までつづいて、大量の写本が伝来することにより、さまざまな特長が助長されているのである。写本はそれぞれ異本であるから、その原典を追求する本文批評の資料として用いることができる。原作者の歌集、連歌集等の編集段階まで、諸本を博搜し調査を重ねると探求することができるのである。

さて、連歌史の上で最も代表的な撰集は『菟玖波集』である。私自身が所有している本文を以下列挙してみよう。『校本菟玖波集新釈』『朝日古典全書本』『連歌貴重文献集成本』『金子金治郎著『菟玖波集の研究』

所収本、「横山重氏旧蔵本複製本」、宮内庁書陵部本三本の写真、個人蔵の写本を自分で撮影した写真、数えてみると七種になる。始めの二書は戦前連歌研究の開拓者となった福井久蔵博士の著書で、「菟玖波集」の注釈は他にはまだない。次の二種は広島大学所蔵の写本の影印本と翻刻である。全巻揃った写本としてはこれが最も秀れた本文というのが現在の定説である。横山重氏旧蔵本と、書陵部本は、「菟玖波集」の一部分にすぎないが、室町初期の書写ということで、不可欠の資料である。「菟玖波集」について何か言うとするれば、この位のものを手元においていなければどうにもならない。専門家の蔵書はこのような質として存在しているのであり、もし学者の蔵書がどんなものか調査するとなれば、ここまで踏み込んで観察すべきであろう。この程度の質の蔵書を揃えることは研究者がみなやっていることであって、作品自体がもっと大きく、かつ異本の多いもの、たとえば、「源氏物語」「枕草子」「平家物語」「太平記」などになると、その経済的な負担はいっそうきつものになる。

次に、自分の専攻する分野に先立つ古典作品が必要となる。すなわち、古今、万葉、伊勢、源氏というように、中世の人々が大よそ諳んじていた作品群を手元におき、折を見て読みかえさなければならぬ。現代の我々はなほだ無学であって、それらを大よそ諳んじていないので、「国歌大観」や「源氏物語大成」などの索引類も手ばなすことができない。しかし、このような作品群について、自分の専攻分野と同じような質量で、蔵書を取り揃えるのは、個人の経済力では到底及

ぶところではなく、代表的な本文にとどめざるを得ない。したがって、詳しい調査の必要がある時は、何らかの手段、つまり図書館等を利用する。

第二の注釈書、研究書についても、前項と同じことが言える。つまり、研究者の参照すべき文献の質量が、一般の人々の想像するであろう地点をはるかに越えているということである。「源氏物語」一つとつてみても、「奥入」「河海抄」「花鳥餘情」「明星抄」「毛津抄」「湖月抄」というように、代表的なものを列挙するだけでもかなりなものである。鎌倉時代の注は、鎌倉時代の源氏観を示す材料として不朽であり、次の注釈によつて価値を減じられることがない。かくして、注釈の堆積は現代にまで継承されてくることになる。現代の研究書についても同じことである。秀れたものは何十年たつてもたえず引用され、基本書の地位をかわられることがない。諸雑誌に掲載される論文も、ここの言及しておくべきであろう。

第三の、背景をなす一群とはこんなものである。最も使用度の高いものは、日本史の基本史料類であり、ごく大ざっぱに言ってしまうと、昔の貴族、僧侶の日記類である。文字を解する社会が極めて小さかったころの文化人達は、日記を残した貴族、僧侶と同じサークルに属する人々であったので、それら日記のなかに、彼等の動静がよく書き残される。国文学の研究水準では、例えば藤原道長のあたりを研究するのに「小右記」「権記」「御堂関白記」等を座右に置くのは全く当然のことである。私の守備範囲では、三条西実隆の「実隆公記」というの

があるが、全二十一冊で出版されている。

国文の研究者の仕事は右のような書物群を常に参照しながら行なわれる。全く日常的な演習の指導の際ですら、十数冊机の周囲に置きつつ下調べして来るのである。もともと精力をついやすのは、何か論文を執筆する時である。その場合、とりあつかう本文を数種類、注釈を数種類、研究書を、研究論文を、史料類その他を数十冊、という規模で座右に積み上げて、一年間苦吟するのである。こうした量の書物を長期間、その多くは研究活動が続ける間ずっと、借し出してくれる図書館が存在し得ようか。もしあったとしても、大学などで、特定の分野の研究者が複数いるとすると、図書館は機能し得なくなることだろう。現実問題として、我々の活動は大学院生として開始されるのである。母校の図書館が院生に開放されるにしても、他の図書館の本を利用する場合、それこそ一冊調べるために一日がかりになる。そこにはかない古写本を見るためなら少しも惜しくない時間ではあるが、考えてみると何とも無駄なことである。この時期にすでに、基本的な書物を自分で揃える以外道のないことを実感してきているのが研究者というものなのである。

六

このように論じてみると、先に見た岡澤氏の評言がいかに文学研究者の感覚とへだたっているかが明らかであろう。古写本の伝来がきわ

めて豊富な、日本における古典学という条件のもとで、国文学研究者の蔵書は肥大化せざるを得ない。これをあまた上で、次のような一文をみる。

「書齋指向の研究者が研究に支障をきたしている証拠を見つけることができなかったということは何を意味しているのでしょうか。」

書齋を研究の拠点にすると、研究に支障をきたすという前提がそもそも成り立たないだけのことである。

「日本の研究者の体質（本を独占したい、本に書き込む等）などの理由が考えられる。」

我々の世代の研究者の蔵書は活字本にすぎない。多数印刷される活字本は買い占めでもしないかぎり独占できるわけではない。出版後年月がたち、たまたま稀覯本になるものはあるけれども、それとて公共図書館で難なく見ることができる。古写本についてならそのような批評がありうるとしても、この種のもものは歴史的な流れのなかで判断すべきである。古写本はたえず読まれることにより、あるいは少くとも夏の虫干しを欠かさぬことよってのみ存続しうるのである。滝沢馬琴は言う、「書は、そぞろに人に貸すと、火をいましぬと、夏毎に虫を払はざるによりて、終にはうしなふものぞかし。」¹³ かりに蔵書を公開しないコレクターがあつたとしても、書物をさらに後代に伝えることだけで独占などというにはあたらぬ。書物は人間よりも長命でありうるからである。

岡澤氏が著書177ページに箇条書にした書齋指向についての六項目について、逐一応答してみよう。

一つには情報量の増加は仮想であって、実際には手元の本だけで十分だという考え方

答え、このような場合、手元の本の質と量がどのくらいあるか確認しなければ何も決定的なことは言えないはずである。我々国文学の研究者は、自分の蔵書の限界をよく承知しており、勤務校の、また公共の図書館への期待はきわめて高い。

今一つは情報入手の物理的困難さが自己負担金内での現物入手を可能にしている。

答え、衣食住に対する出費を無理に減じることによって現物入手を可能にしている。「情報入手の物理的困難さ」とやらは何の関係もない。

第三には個人の書齋の方が充実している。

答え、自分の専攻のごく一部についてはそうなる可能性はありうる。しかし全般的な蔵書について図書館の予算と個人の経済力の差は明白である。

第四には大学などの所屬機関が研究費を与えすぎている。

答え、これは第六項と同じく、ほとんど我々を惘然たらしめる発言である。石油ショック以後専門書の値段は一万円を越えている。それを上述の規模で購入しつづけるのが研究者の普通の行動であり、本を買わなくなったものは最早現役とはいえないのである。諸資料は叢書の形で出版され、かつ分売しないで会員制などというものも多い。その

図書館情報学科への期待（岩下紀之）

うちの一冊がほしいために全巻を求めたのもしばしばである。研究費が余るのなら、国文科へまわしていただきたいものである。

第五には全くの個人的気質の結果。

答え、およそ回答に値いしない発言である。何故なら、統計で書齋の利用が全体の95%に達しているものを個人的と片付けるなら、そもそも統計をとる意味がないからである。

第六には本が安いことなどが考えられる。

答え、第四項ですでに答えたことと関連する。我々は本が安いという実感を持つことができない。為替相場などの機械的な換算は、この場合意味がない。円高、円安につれて本の定価が変動するわけもない。大学院生の収入、就職した初任給に対し、必要とされる書物の費用を考え合せていただきたいものである。

さてこのような箇条書きのあと、岡澤氏はさらにこう言う「研究者に『図書館がなかったら貴方の研究は続行できなくなりますか』という問いは余りにも唐突であろうか。」これは唐突というよりピントはずれである。書齋も使うし、図書館も使う。二者択一の問題提起がそもそもおかしい。書齋に備えるべき書物と図書館に備えるべき書物の違いを調査しなければならぬのである。「大日本史料」「大正新修大蔵経」等を眺めてみるがよいのである。金額、分量からいって、個人で購入できるものかどうか一目でわかることなのである。

このように逐一岡澤氏に応答してみると、氏の誤りは結局学問そのものの内的論理に対する無感覚に起因しているものである。しかしそ

れだけならば、このようにきびしい論難を加える必要はないであろう。より深刻な問題が現われて来るのが予感される。情報学は現時点においては、産出されつつある大量の論文をいかに整理し、いかに速く各研究者に提供するかを考察しているように見える。その限りにおいて自然科学系の研究者の必要について充分に答えられる内実をそなえているのであろう。また彼等が図書館に求めるものは、諸論文の可能なかぎりの迅速なリファレンスにつきるであろう。

しかしながら、国文学等人文系の学問ではこのところがすでに異なっているのである。我々が図書館にもとめるものは古典の本文、注釈、研究書、諸資料であり、論文はそうしたもののうちの一部にすぎない。またその入手の多少の遅れもどうということはない。我々の読みは全く個人的なものであるからして、他人と同一発見の先後を争うなどということはあまりなく、特許の申請などということも関係ない。自然科学では全く逆であろう。古典など問題にならない。ユークリッドの原典を読むことが数学の先端と何のかかわりがある。ニュートン、ガウス等の論文がラテン語で書かれていることを知る必要がどこにあるか。それらに、何百年にわたって語学的な注釈が堆積してくるなどということがあろうか。ところが、人文系の学問、特に古典学とは、まさにそうしたことをやっているのである。

自然科学について我々は全く無知であるが、こんな例を出してみよう。天文学、医学、数学などを考えたとし、図書館は、木星、エイズウイルス、フェルマーの定理といった品々を管理保存はしない。と

ところが、「万葉集」「源氏物語」等々は、まさに図書館がとりあつかうべき中心的な書物ではないか。ここにおいて、図書館情報学と国文学は否応なしに図書館の場での出会うのである。その時「本が安い」だの「研究費が多い」だのという感覚で物を言われるのは何とも情けないことである。事態はまことに深刻なのである。

アメリカの自然科学者の動向から抽出したモデルを用いて学問的考察を進める。そのこと自体は何ら問題はない。しかし、そのモデルを用いて、別の文明圏、別の人文系の学問をとりあつかう時、モデルにあわないうさまざまな現象、例えば学者が書齋で本を読む、というようなことを、「偏向」などと決めつけたところで、何も生産的な結果はでてこない。日本ではそのような例はいやというほどあったものだ。明治維新をブルジョア革命と見るかどうか等の不毛の議論はもう沢山である。抽出されたモデルにあわないう別種の事例をもって、モデル自体をより高めて行く、それ以外に情報学の活性化はない。本学のような単科大学にはその可能性は充分にある。酸化有機化合物、国際関係論、高エネルギー物理学等等に同時に通ずるのとは不可能である。しかし、国文学、英文学それぞれの内的論理を一通り見わたす位のこととは充分可能であり、それによって本学の研究水準を高め、図書館の蔵書を充実させることについて各料が協力し合って行くことができよう。本稿に「図書館情報学科への期待」と題した所以である。

注

- (1) 渡辺照宏「お経の話」(岩波新書) 69ページ
 (2) "Lexicon in Veteris Testamenti Libros" Praeface XII
 (3) すなわち、ヘブライ語の "alma", "zera" に、キリスト教の教理がなじむかどうかの問題である。

(4) 三一書房版上巻45ページ

(5) 現代評論社の復刻本305ページ

(6) 「サミュエル・ジョンソン伝」(みすず書房) 2・173ページ「フランス滞在中にジョンソンは大体において非常に頑固にラテン語での会話で押し通した。(中略) サー・ジョシュア・レノルズが王立アカデミーの或る昼食会の席で、彼を極めて高位のフランス貴族に紹介した時も、彼はフランス語をしゃべろうとせずラテン語を使った。この貴族は恐らくジョンソンの英語式の発音のせいであろう、彼の言うことを聞き取れなかった。」

(7) 「ゲーテとの対話」中(岩波文庫) 238ページ

(8) 「大雅・文王」序には、「文王受命作周也」とある。

(9) 「小雅・鹿鳴」序には「燕羣臣嘉賓也」とある。

(10) 「更級日記」冒頭

(11) "Septuaginta" Württembergische Bibelanstalt Stuttgart 〇 Explanation of Symbols XXXII

(12) "Biblia Hebraica" Foreword XXX

(13) 前田護郎「新約聖書概説」(岩波全書) 77ページ「ギリシャ盛期の劇作家・哲学者・歴史家のものは何れも中世紀の小文字写本で原作を離れること一二〇〇—一六〇〇年であり、ホメロスといえども完全な写本は十三世紀のものである。」高津春繁「西洋古典文献学(7)」(筑摩書房「世界古典文学全集」月報(8))「彼(アウリスバ)がこの旅行でコンスタンティ

ノポリスからフィレンツェのニコリに送った一本は、十世紀書写の、現在もアイスキュロスとソフォクレス、アポローニオス、ロディオスのテキストの基を成しているラウレンティアヌス本である。」
 (14) 「吾仏之記」(近世文芸叢刊9) 6ページ